



エクランドWakakoのアメリカ便り

新生児医療の現場から

エクランドWakako 高校卒業の2年後に渡米。1991年にBSN（看護学学士）を取得、その後CCU、ICU、NICUでの勤務を経て2002年に新生児医療専門分野でMSN（看護学修士）を取得しNNPの資格試験に合格。現在、新生児医療専門グループの一員として、市内の複数の病院でNICU専門医療に携わっている。

from
USA

3 家族への思いとベビーたちへのケア

ディベロプメンタルケアに出会って

前回までに、私がアメリカでNICUでナースとして働くようになるまでの経緯、およびNNP（Neonatal Nurse Practitioner）の資格など制度的なことについてお話ししてきました。今回は、NICUにおけるファミリーケアについて考えてみます。

私はこれまで、スタッフナースとして、また、NNPになってからも複数のNICUを経験してきました。施設ごとに治療の仕方や標準とするケアに多少の違いがあり、使う器具も違えばNICU内のデザインも違いますが、その違いを超えて、共通に目指しているものがあるのを感じます。なかでも不安を抱えるご両親が、保育器の傍らで、少しでも居心地よく、温かい気持ちでひとときを過ごせること、そして、胎内から胎外へという劇的な変化を経験し、外の世界に懸命に適応しようとしているベビーの発達をサポートするような環境を整えることが大きな柱だと思います。後者については、近年ディベロプメンタルケア（Developmental Care）として、日本でも定着していますね。

ディベロプメンタルケアに出会った10年前、私にとってはその根底にある考え方そのものが新鮮で、そのような研究が行われていることに心を動かされました。ディベロプメンタルケアにおいては、ベッドサイドでベビーを絶えず見ているナースの役割が重要であることはもちろんですが、ご両親もナースと同じくらい、ときにはナース以上にケアに貢献するといっても過言ではありません。また、実施するケア内容はもちろんですが、ベビーの脳神経系の発達などそのベースになっている考え方、科学的な根拠を理解することで、ケアがより意味のあるものになるという点も重要です。その考え方をご両親に紹介し、子どもの反応の捉え方などを親にできるかぎり理解していただくなど、ご自身の子どもを知る過程をお手伝いすることは、ベビーへのケアを向上するとともに、親自身へのケアにもなります。

ご両親への対応は、ベビーが入院した日から始まります。ディベロプメンタルケアが生

まれる前の80年代前半までは、24週で生まれた低出生体重児などの場合、生まれてから長期間は、ご両親も触れてはいけないとされていました。今も刺激を与えすぎはいけないことには変わりはありませんが、オムツ交換など最低限しなければならないことをご両親にやっていただいたり、面会中にタッチングをおすすめしています。そうすることで、「この子のことを一番わかっているのは私たちなんだ」とご両親に感じていただけるようにとの配慮からです。



March of Dimes (低出生体重児や疾患を持つ赤ちゃんのための基金を設立している団体)の基金集めのために作られたディベアです

あるお父さんのケース

先月号でもお話した、私をはじめNICUに出会った大学病院(約50床)でのエピソードを紹介します。母親が重症のHELLP症候群で妊娠を継続することができなくなり、児にもストレスが見られて24週で帝王切開となったケースでした。NNPとNeo (Neonatologist: 新生児専門医)で臍動静脈ラインを入れ、ベンチレーターをセッティングしたりサーファクタントを投与するなどして、落ち着くまでにたっぷり2時間くらいはかかったと思います。落ち着くとすぐに父親を呼びました。こわごわベッドの横に立った父親に、「お子さんはお父さんの声も聞いているし、おなかの中とは違った環境にいることもよくわかっているんです。まぶたもまだ開いていないけれど、明暗はわかっているんですよ」とお話しました。母親の高血圧のため、かなり小さいIUGRの児でした。「私も最初、NICUに勤めたときは、赤ちゃんに触るのが怖かったですよ」と言うと、「こんな小さい子を見るのは怖い」と不安げだった父親に、少しホッとした表情が見られました。「パパになられておめでとうございます」というと、「結婚11年経ってようやくできた子なんだ」と、不安と深い愛情のまざったまなざしで息子の小さなからだを見つめていました。

この段階では、ご両親の不安な気持ちに配慮することを第一に考え、ディベロプメンタルケアの初歩的なことがらについて、ほんの少しだけお話しします。この父親には、ノイズをコントロールすることの大切さや、過剰な刺激を避けるため、どうしても必要なケアは一度にまとめて行っていることなどをお話しし、まずは、ベッドサイドに立っていただきました。私の手をベビーの頭を包むようにそっと当て、父親には手で足と膝を包み込む

ようにあてがってもらい、そのままじっと動かさないようにとお願いしました（このとき、ほかのナースに写真をそっと撮ってもらいます）。2つの手に包まれたベビーは、動くこともむずかることもなく、酸素飽和度も一定に落ち着いていました。父親と私はじっとそのまま座ること5分。まず、私がそっと手を離します。私の真似をするように、父親もベビーの体から手を遠ざけました。このとき、ベッドから抱き上げたりするのは刺激が強すぎると判断とその理由を説明し、抱き上げなくても、手をあてることで、抱いたときに似た感触と満足感を感じていただきたいということをお話します。ポラロイドの写真には、父親の手に包まれたベビーの様子がはっきり写っています。私はその写真に日付けと時間、そして、「Daddy held me for the first time, I love my Mommy and Daddy」と書き、「ママに持って行ってあげてくださいね」と父親に渡しました。現在はどこでもデジタルカメラですが、当時はまだポラロイドカメラがよく使われていました。

24週の赤ちゃんには、実にさまざまな危険が待っています。その危険を少しでも回避して成長していけるよう、スタッフと家族が一緒になって努力していくのがベストだと考えます。インфекションコントロールの重要性、ベビーに心地よい刺激を与えること、発達に良い影響をあたえるポジショニングの必要性、周りの環境（ノイズ、明るさ、温度など）のコントロール、そして、ご両親に「自分にも子どものためにできることがある」という満足感を持っていただけるよう、親の気持ちを一生懸命考えつつ、ベビーが必要とするものをさまざまな側面から考えていく——これはテクニック以上にアートが要求される領域であり、NICUが私を離さない理由の1つです。

その後は、血小板の投与、サーファクタント投与の繰り返しなど、12時間の夜勤シフトがあっという間に過ぎていきました。そんな状況のなかでも、なんとか時間をとって、別

NNP (Neonatal Nurse Practitioner) ▶大学院レベルの専門教育を修了した新生児専門ナース。NICU内で患者を診るなど、幅広い役割と責任を担う。

March of Dimes▶ポリオを患ったフランクリン・ルーズベルトが、体が不自由な子どもが少しでも減るよという願いを込めて、1938年に設立した非営利団体。ポリオワクチンの研究から出発したこの団体は、現在、赤ちゃんたちの健康向上を目的とする基金集めのために大々的なイベントを行ったり、行政レベルで新生児のケアに関する法律の改正に関わるなどの活動を行っている。

Neonatologist▶新生児専門医。米国のNICUで主治医になるための資格。医学部卒業後、まず小児科医のレジデント（研修医）として3年間訓練して小児科医専門試験に合格し、さらにNICUで丸3年間主治医の指導を受けてはじめて資格試験の受験資格が与えられる。資格取得後も、更新のために7年ごとに試験を受け直さなければならない。

のナースにベビーを15分ほどお願いし、母親の所へ説明に行きました。実際にベビーをケアしているナースからベビーの様子を聞かせてもらえることほど、心強いことはないとたくさんのお母さんたちから学びました。また、自分が母親になってからは、出産の経験によって、NICUでのケアについても、さらに深く考えることができるようになったと感じます（もっとも、世界観が変わる経験というのは人それぞれで、出産はその中の一つにすぎませんし、子どもを持つ持たないが、ケアの質を左右することはありませんが）。



Neonatal Nursing Conference（新生児看護学会）がフロリダで行われたときに撮りました。リサ（右）、リズ（中央）もNNPとしてNICUで活躍しています

「家族」を支える「ナース」を支えること

このときの私の勤務先の上司は、「お母さんナースは貴重な存在」と言ってくださり、母親が働きやすいようにスケジュールを考えてくれるなど、いろいろな面でサポートしてくださいました。そのお陰でパートタイマーで働くナースも大勢おり、私も子どもができてからも、夜勤を続けることができました（家族も親戚もいない土地で、主人と2人で交互に子どもをみるほかはない状況だったことを考えると、職場の理解なしにはNICUナースを続けることは不可能でした）。80人ほどのNICUナースが所属する部署でしたが、その半分以上に子どもがいたため、有能なナースに働き続けてもらうためにも職場の理解は不可欠でした。自分の家族を大切にしているという実感や安心感、満足感が欠けた状態では、無理が出てくるのは目に見えています（日本では有能なナースたちが働き続けられるよう、どのような工夫が行われているのかかかってみたいところです）。

生まれるときも、この世を離れていくときも、いっしょにいるのは家族です。NICUという場所は、誕生というお祝いごとと、死という悲しい出来事が背中合わせに家族に突きつけられているという、非常に特殊な空間です。今回は、家族のケアのなかでも、もっともきめ細かな配慮を必要とする「死別時のケア」について、私の経験からお話ししたいと思います。